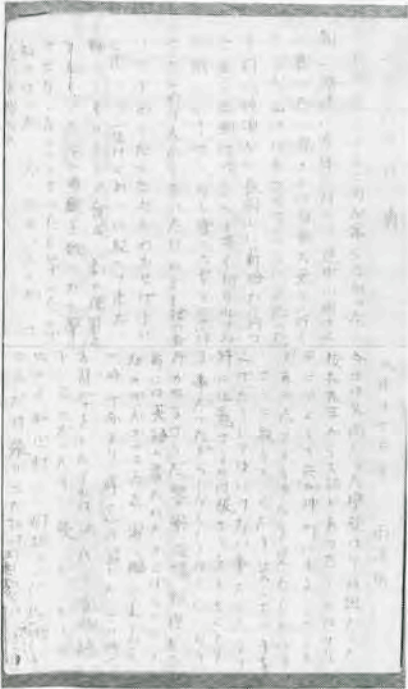


かたりべ 37

豊島区立郷土資料館だより



いろいろなノートを使った日記帳 きれいな千代紙を貼ったり、ひもで綴じたりしたものもある。

1945年9月16日・17日の日記

疎開は続く

左の日記は、一九四五（昭和二〇）年九月一六、一七日の部分です。日本の無条件降伏によって戦争が終わってからちようとひと月後、場所は山形県寒河江町（現・寒河江市）、書いているのは前年八月末から当地に集団疎開していた長崎第二国民学校（現・要町小学校）五年生の岡佑子さんです。

戦争は終わったのに、まだ東京には帰れません。東京は空襲被害などによって混乱しているため、というのがその理由です。戦争に勝つまでは疎開先で、という疎開学童たちのがんばりは二重に期待外れになったのです。一六日の記事にあるような薪取りなどの作業に精を出す日が続きます。

一七日にはアメリカ（占領軍）の兵隊についての注意が書かれています。『神町』というのは寒河江の近く飛行場があるところで、敗戦直前に空襲を受けています。米兵の来る一九日から三日間は学校は休みになります。

岡さんの日記はすでに五冊分をご寄贈いただいています（当館特別展図録『子どもたちの出征——豊島の学童疎開・2——』四〇頁）。

ここにご紹介したのは最近発見され寄贈いただいた最後の疎開日記で、東京へ出発する一〇月三十一日までのものです。

（青木）

特集 新館設立に向けて XI

博物館の仕事ってナニ？ (5)

博物館実習の実像

突然ですが、ここで問題です。

一般に「保育園で働く専門職員は「保母（保父）」、学校で働く専門職員は「教員」、図書館で働く専門職員は「司書」です。それでは、博物館で働く専門職員のことを何と言うのでしょうか？

あまりにも簡単すぎたでしょうか？ えっ、難しかった？ そうです。答えは「学芸員」です。そういうえば、今では漫画の世界でも「学芸員もの」があるんですよ。知ってましたか？

さて、今回の「博物館の仕事ってナニ？」では、この学芸員という専門職員になるために必要な学芸員資格を取得する際の最終関門といえる博物館実習を取り上げます。具体的には、昨年九月一六日から三〇日までの二週間（実質一二日間）、当館で実施した実習が、どのような手順を経て実施に至り、どのような実習内容なのかについて紹介していくことにしましょう。

I 実習の前提として

まず、当館で博物館実習を行なうか行わないかについて、前年の秋ごろまでに結論を出します。該年度の事業内容や職員体制などによって、行なうことが難しい場合もあるためです。実施することが決まれば、当館の事業に比較的余裕のある時期二週間を選んで、実習期間を設定します。今までのところ特別展の開催中に実習期間を設けています。そして、一月中旬をめぐりに、受け入れについて事前に問い合わせのあった大学、今まで実習生を受け入れた大学、区内の大学に対し、博物館実習の実施要項を送付します。実施要項には、実習の期間・実習の内容・受入条件（後述）・必要書類等が明記されていますので、実習期間や受入条件をクリアする学生は、二月一日～二八日までの一ヶ月間に必要書類を揃え、大学の博物館実習担当を通して申し込みます。

II 実習生に求めるもの

実習生の受け入れは、学芸員の後進を育てていく意味で、博物館にとっても重要な活動のひとつであるといえます。そのため、この期間は実習生が効率よく実習できるように、資料館全体で受け入れ体制を整えています。

資料館側も真剣に取り組みますので、実習する学生たちにもいくつかの条件を提示しています。①大学で歴史学・民俗学・考古学のいずれかを専攻していること（当館が歴史系の地域博物館であるため）、②博物館学の履修をすでに修了しているもの、③将来、学芸員として就職することを希望するもの、④実習期間内全日出席できるもの（就職活動等による欠席は一切認めない）、これに加えて、当館で実習を希望する理由と、卒業論文（あるいは自分の研究）テーマの内容をそれぞれレポート用紙一枚程度にまとめて提出してもらっています。

こうした条件を提示するのは、学芸員職に就く気もないのに、とりあえず実習を受けて資格だけは取得しておこう、といういい加減な気持ちで申し込む学生が意外に多く、そうした学生が一人でも実習生のなかに入っていると、真剣に実習に臨んでいる他の学生にとってはいい迷惑に

1994年度博物館実習カリキュラム

月日	実習内容		
9/16	午前	自己紹介・オリエンテーション	資料館の管理運営、資料館事業内容について
	午後	展示シナリオの作成方法Ⅰ（講義）	展示シナリオの作成方法Ⅱ（講義）
9/17	午前	生活資料整理の方法Ⅰ（講義）	生活資料整理の技術Ⅰ（講義と実務）
	午後	生活資料整理の技術Ⅱ（講義と実務）	生活資料整理の技術Ⅲ（講義と実務）
9/18	午前	生活資料整理の技術Ⅳ（講義と実務）	生活資料整理の技術Ⅴ（講義と実務）
	午後	近世文書整理の方法Ⅰ（講義）	近世文書整理の方法Ⅱ（講義）
9/20	午前	施設見学Ⅰ 雑司が谷宣教師館（実地見学）	施設見学Ⅱ ことぶきの家倉庫（実地見学）
	午後	近世文書整理の実務Ⅰ（講義と実務）	近世文書整理の実務Ⅱ（講義と実務）
9/21	午前	近代文書整理の方法Ⅰ（講義と実務）	近代文書整理の方法Ⅱ（講義と実務）
	午後	現代文書整理の方法Ⅰ（講義と実務）	現代文書整理の方法Ⅱ（講義と実務）
9/22	午前	図書資料整理の実務Ⅰ（講義と実務）	図書資料整理の実務Ⅱ（講義と実務）
	午後	文化財学芸員の実務Ⅰ（講義）	文化財学芸員の実務Ⅱ（講義）
9/24	午前	特別展監視の実務Ⅰ／展示シナリオの作成Ⅰ	特別展監視の実務Ⅱ／展示シナリオの作成Ⅱ
	午後	特別展監視の実務Ⅲ／展示シナリオの作成Ⅲ	特別展監視の実務Ⅳ／展示シナリオの作成Ⅳ
9/25	午前	特別展監視の実務Ⅴ／展示シナリオの作成Ⅴ	特別展監視の実務Ⅵ／展示シナリオの作成Ⅵ
	午後	特別展監視の実務Ⅶ／展示シナリオの作成Ⅶ	特別展監視の実務Ⅷ／展示シナリオの作成Ⅷ
9/27	午前	生活資料整理の方法Ⅱ（講義）	生活資料整理の技術Ⅵ（講義と実務）
	午後	生活資料整理の技術Ⅶ（講義と実務）	生活資料整理の技術Ⅷ（講義と実務）
9/28	午前	館外調査の実務Ⅰ（講義と実務）	館外調査の実務Ⅱ（講義と実務）
	午後	館外調査の実務Ⅲ（実地調査）	館外調査の実務Ⅳ（実地調査）
9/29	午前	展示シナリオの作成Ⅸ	展示シナリオの作成Ⅹ
	午後	展示シナリオの作成ⅩⅠ	展示シナリオの作成ⅩⅡ
9/30	午前	展示シナリオの作成ⅩⅢ	展示シナリオの作成ⅩⅣ
	午後	展示シナリオの発表と講評	実習の反省会

なってしまうからです。こうした条件を提示したためかどうかわかりませんが、昨年度も今年度も申し込み人数が受け入れ定員六名を越えることはなく、真面目に実習に取り組む学生を受け入れることができました（今年度は五名）。

Ⅲ 実習のカリキュラムとその実像

実習生たちは、二週間の実習期間中に博物館の活動に関わるさまざまな仕事——民具資料・

文書資料の整理、写真の撮影・焼付、石像物調査を体験するほか、特別展の展示シナリオ案（後述）を班ごとに作成するなど、盛りだくさんの内容をこなしていかなければなりません。そのため左に示したようなカリキュラムに従い、おもに学芸員と社会教育指導員で内容を分担して実習生を指導しています。

実習内容は、大きく分けると前半が実務実習

で、後半が展示シナリオの作成ということになります。実務実習については、まずどうして博物館で各該当テーマについての作業を行なう必要があるのか、あるいは、資料をどのように扱うかなど、基礎的な講義から行ない、資料カード・図書カードの記入方法、写真撮影および焼き付けの方法、石像物の拓本や実測のしかたなど、具体的な実務作業へと進んでいきます。

一方、展示シナリオについては、実習生が当館の学芸員であるということを想定して臨み、班ごとに展示テーマを決め、どのような資料を収集し、どのような資料列品を行なうかまでを検討し発表するものです。シナリオ作成にあたっての条件は、①現在の展示室内で展示構成を考えること、②予算的なことは考えなくてよいが、実現可能な範囲で考

えること、③現在当館で収蔵している資料に留まらず、資料の収蔵が予想される資料保存利用機関等からの借用を想定



館外調査中の実習生

しても構わない、ということにしました。実習生たちは、頭を悩ましながらも展示シナリオづくりに熱心に取り組み、最終日には「がんばれ荒川線」走り続けて、永遠に」と「池袋デパート物語——池袋へのデパート進出とその時代」二本のシナリオが発表されました。

さて、実習生たちはこの発表が終わったからといって手放して喜ぶわけにはいきません。なぜならば、実習終了後一ヶ月以内に「地域博物館の問題点と今後の課題」という題名でレポートを作成（原稿用紙一〇枚程度）し、資料館へ提出しなければならぬためです。資料館から大学へ提出する実習生の成績は、このレポートの内容も含めて総合的に判断するため、単位の欲しい実習生たちは何としても提出しなければなりません。

実習期間中に学んだこと、考えたことをテーマに沿ってまとめ、提出し、はじめて博物館実習のすべてから解放されるのです。



最終日に行われた展示シナリオ報告会

IV 博物館実習を行なう意義

博物館実習を行なうと、その期間中は博物館の機能がマヒしてしまうという理由で、実習生の受け入れを行なっていない博物館もあるようです。たしかに、そのような側面があることは否定できません。ただ、短い期間ながらも実習生たちと「つきあう」ことによって、現役の学生が博物館に対してどのような考え方を抱いているのかを知ることができ、また、実習生たちに講義することによって、私たちがふだん心にして描いている博物館像や資料に対する考え方を、自分なりに整理する機会にもなっているなど、プラスの側面もあります。そして何となく、学芸員の後進を育てていくという重要な役割を担っていることも忘れてはいけません。

一般に、学芸員資格を取得した学生のうち、実際に学芸員職に就くのは一〇程度といわれています。当館で実習を行なった学生も例外ではなく、その多くが「非業界」へと旅立っています。しかし、「非業界」の世界においても、取得した資格を活かしていく場はいくらでもあると思います。こうした学芸員有資格者を核として、博物館の理解者層をさらに広げていくためにも、資料館では、事業面や人的側面で実施不能の場合以外は、今後なるべく博物館実習を行なっていくと考えています。（秋山）

郷土資料館なんでもQ&A

Q まもなく桜の開花時期になりますが、日本の桜の代表種ともいえるソメイヨシノが、駒込の植木屋によって全国に広められたというのは本当なのでしょうか？

A うーん、難しい質問です。毎年今頃になると同様の質問が多いんです。ここでは、ソメイヨシノに関して確実に言えることだけ挙げておきましょう。①遺伝学的研究によって、オオシマザクラとエドヒガンの雑種であること、②明治三三（一九〇〇）年に藤野寄命が上野公園の桜の調査報告のなかで「そめいよしの」という名称を使用したのが最初であること、③「そめいよしの」の「そめい」は、江戸時代以降上駒込村の小字（こあざ）であった染井を示すこと、④明治期の間に急速に植樹されていったこと、この四点くらいでしょうか。

かつて駒込染井にたくさんあった植木屋たちが、ソメイヨシノの栽培や流通にどのように関わっていたのかについては、多くが謎に包まれています。郷土資料館では、こうしたよくわからない事柄を解き明かすため、常にアンテナを張り、資料調査や研究を行なっています。（秋山）

高まる町工場への関心

特別展「町工場の履歴書」を終えて

当館では、昨年九月九日から一月二〇日まで特別展「町工場の履歴書」を開催しました。

会期中の見学者は三〇二三名を数え、そのうち三分の一は豊島区民でしたが、埼玉、神奈川、千葉などの近隣県からも多くの方が来館されました。そして、全見学者の三四%にあたる一〇三四名の方にアンケートにお答えいただきました。ご協力ありがとうございました。

今回は、近年の「町工場」ブームのせいか、特別展のタイトルにひかれて初めて来館された方や、何度も展示を見に来られた方が多かったようです。皆さんからは、感想や意見のほか、町工場に関する資料や情報も数多く寄せていただきました。見学者の声を一部ご紹介します。

◎池袋近辺は最近ますます近代化がすすみ、大型小売店がどんどん増えているので、一見街から歴史が感じられないが、今回この特別展を見て当たり前のことだが、この街にも歴史があることを具体的に感じる事ができた気がする。

〔和光市・二二歳女性〕

◎豊島区の近代化の側面が極めて分かりやすい資料をもとに展開して頂いたことに感謝。都市の近代化の歩みが今回の展示にもよく示されて

いたが、それだけに区の文化財保存に対する熱心な姿勢が読み取れて貴重なものと思った。今後もしこうした催しを大事にして行って欲しい。

〔千早一丁目・七六歳男性〕

◎今後、都市の拡大のなかで町工場などがどう変貌していったのかを示す企画をもたれたら、町工場の問題を都市史のなかに組み込んだ面白いものができるかと期待します。

〔群馬県・三六歳男性〕

◎大変面白かった。産業構造が激変しているだけに貴重な「歴史」だと思う。今後庶民のくらしと密接だった街のお店（小売業、ひき売りなど）の特別展を。（南長崎四丁目・六二歳男性）

◎工場はほとんどないけど実物がのこされていると、ぼくもしゃいんみたいにかんじます。こういうのはきょうみがなかったけどおもしろくなった、工場の道をなげなくとおっていたけど、むかしはあんな工場があったなんておどろいた。

〔雑司が谷二丁目・一一才男子〕

——戦時中の学徒動員についての情報も多く寄せられました。

◎千川町に在住、武蔵中学校から中島飛行機田無工場に動員。

〔八王子市・六五歳男性〕

◎戦時中学徒動員で鈴木シャッター（鈴木機械工業）にいった。大塚駅から氷川下に抜ける大通りの西側に第一工場、第二工場とあった。機関機の機関銃の部品、高射砲の薬莖などを軍に納めていた。

〔新宿区・六五歳男性〕

◎女学校の四、五年生時代は戦争もたけなわで板橋の軍需工場日本光学で機関機のレンズ関係（心取りという作業）についていました。何回も空襲にあつて防空壕に逃げ込んだものです。

〔北大塚三丁目・六七歳女性〕

◎大学一年生の時に石川島航空機工場（当時横浜採用）に昭和二〇年四月から終戦まで勤務。

ゼロ戦の発動機の一貫生産で鋳物工場の溶解現場に従事中、二〇年六月一九日横浜大空襲に遭遇して、当日徹夜明けのため、朝と昼食が食べられなかった。

〔八間市・六六歳男性〕

◎立教中学校時代、明治製革のタンニン部で働いていた。

〔南長崎二丁目・六六歳男性〕

◎戦時中、女子商業校生を引率して染工場（亀戸、風船爆弾用の紙加工作業）、板金工場（荒川、航空機部品）などに出勤し、毎日無事を祈りながらの生活でした。

〔浦和市・七五歳男性〕

——お寄せいただいた情報については、特別展が終了した現在も調査を進めています。また、特別展の成果と課題については、後日『一九九五年度年報』で報告する予定です。

〔横山〕

資料館の片隅に、かつて区民の方から寄贈されたまま「未整理状態」となっていた絵はがきが二〇〇枚ほど眠っていました。そのうちの大部分は「山田千代氏寄贈」と書かれたカード付きの紙バッグに入っていました。それ以上の手掛かりはなく、昨年夏整理作業に着手した時には、資料そのものから手掛かりを探っていくほか途はありませんでした。

数枚の絵はがきがセットになった袋入り絵はがきを整理するのは容易ですが、問題は数量的に全体の七割を占めるバラのものです。しかもほとんどすべてが未使用なので、当初は絶望的な状況でした。そこで、作業手順として、まず袋入りとバラのものに分け、さらにその中で細分し、最小の分類ごとにまとめて整理番号を付し、一枚ずつに枝番号をつけて、資料カードに記録していきました。すると、いろいろなことがわかってきました。

かつて、明治・大正・昭和初期までの絵はがきは、それ以前の浮世絵・錦絵に代わって情報の記録・宣伝・周知・保存の役を担っていたとも言え、あらゆる分野にわたっていました。しかし、何といっても今回整理した絵はがきの特

色は、全体の四分の一にあたる約五〇〇枚が美術展覧会絵はがきで占められていたということです。続いて、それらに印刷されている展覧会名を頼りに分類してみると、一二〇種類あまりに分けられました。一四cm×九cmの縮小サイズでも素晴らしい作品が多く、ぜひ実物を見たいという気持ちにさせられます。

年代の判明した最初のものが大正八年（一九一九）の第一回帝展、最後が昭和二六年（一九五二）の第七回日展と三三年の幅があります。そのほかに、江戸時代後期の画家岸駒、明治期の画家川端玉章、同じく彫刻家高村光雲、画家寺崎広業等の顕栄あるいは記念絵はがきも出てきました。

いよいよ、寄贈者は日本画家の身内の方に違いない、もう少し手掛かりを、と整理を進めていくうち、「市外田端四〇七 山田申吾様」宛の昭和初年の使用済み絵ハガキが見つかりました。ついに名前を特定することができ、美術事典によって略歴を知り得ました。父の山田敬中氏も日本画家であること、川端玉章門下で明治二四年（一八九一）岡倉天心率いる日本青年絵画協会に参加、同二九年には東京美術学校嘱託

教員となるが、同三二年美校騒動の際天心・横山大観らと行動をともし辞職、日本美術院創立に参加したこと、寺崎広業とは美校時代の同僚で、やはり行動をともし仲間であったことなどがわかり、やっと整理してきた絵はがきと結びつけることができたのです。

なお、岸駒（岸派創始者）との直接的な関連は現在のところ不明ですが、光雲はやはり天心の抜擢で、敬中氏より七、八年早く美校教授となっており、また玉章は巢鴨に居を構え、明治四二年小石川区に川端画学校を開いて、敬中氏もそこで教えたということです。

一方、山田申吾氏については、資料館所蔵図書の中に氏の画集二冊を見つけ、それによって詳しい経歴・作品等も調べられました。氏は山田敬中氏の次男として明治四一年前記住所にて出生、大正一五年東京美術学校日本画科入学、昭和六年卒業、在学中の同五年に第一回帝展で「水辺初夏」が初入選、美校同期に東山魁夷・橋本明治・加藤栄三らがあり、在学中から卒業後も結城素明に師事しました。結城素明は父敬中と玉章門下の相弟子でもあり、日本画に洋画の写実を取り入れた画家として知られ、山田申

吾氏の穏健な写実に基づく作風は、師や同門の東山魁夷の作風とも共通したところがあるように思われます。

戦後になると日展で何度も特選を受賞、昭和三八年には日本芸術院賞も受賞、日展では会員・評議員・理事となりました。そのほか、昭和一年に田端より長崎東町（現豊島区要町）に居を移したと、昭和一四年に千代さんと結婚したことも判明しました。なお、申吾氏が昭和五二年に六八歳で亡くなったあたりも、ご子息が要町にお住まいです。

しかし、これらのことがらは、資料の寄贈を受けた段階で調査記録として残しておくべきでした。資料受け入れ時の聞き取り調査の重要性を今回ほど痛感したことはありません。

昨年末にようやく二千枚の絵ハガキ整理は終了しましたが、なかでもこの五百枚の美術絵ハガキは、山田敬中・申吾の二代にわたる日本画家の足跡を探る上で貴重な資料となることでしょう。ことに、申吾氏の画風確立の過程を考えていく上では欠かせないものではないかと思われまます。

展覧会の種別をみるだけでも帝展―新文展―日展の官展系の流れや、院展などのオーソドックスなものばかりでなく、二科展、独立美術協会展ほか在野の洋画を専らとする展覧会に

も足繁く通い、内容的にも様々なジャンルにわたって研究している様子が窺えるからです。作家名からみても師である素明や同門の魁夷の作品が多くあるのは当然としても、区内転居組の洋画家鶴田吾郎・熊谷守一の作品がいくつも含まれていることから、彼らとの近所づきあいがあったのかも知れません。

郷土資料館では、一九八四年の開館以来「戦争と平和」、「都市化」の二大テーマを中心として、さまざまな題材から豊島区地域の歴史の掘り起こし作業を進め、その成果を特別展、あるいは資料集・研究紀要の刊行などによって公開・報告してまいりました。

しかしながら、当館の常設展示で扱っている長崎アトリエ村など、芸術面において豊島地域がどのような位置にあり、どのような影響を与えたのか、についての検討はまだ緒に就いたばかりであり、多くの課題が山積しています。今回取り上げた絵ハガキの整理をきっかけにして、今後芸術面からの調査・研究も続けていきたいと思えます。

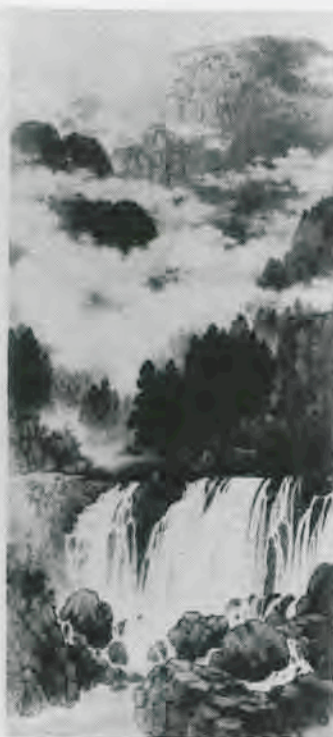
(小池)

第一河津御太子車道美術展覧會出品



長崎村の春 鶴田吾郎

帝國美術院第四回美術展覧會出品



夏冬二題(其一)雨後 山田敬中

豊島区立郷土資料館からのお知らせ

★刊行物発刊のお知らせ

◎郷土資料館調査報告書11

『中世豊島氏関係史料11豊島氏編年史料II』

豊島区にゆかりの中世領主豊島氏に関する史料集の第三弾です。三年前に刊行した『編年史料I』のあとを受けて、武蔵豊島氏が太田道灌に滅ぼされた文明一〇（二四七八）年以降の、戦国・織豊期の豊島氏関係史料が収録してあります。既刊の第(1)集・第(2)集と同様、中世の豊島を知る手掛かりとしてご活用いただければ幸いです。

◎郷土資料館調査報告書12

『千川上水史料集1』

本史料集は、かつて豊島区内を流れていた千川上水に関係する古文書を翻刻したものです。今回発刊する第1集では、駒込の西福寺に所蔵されている千川上水関係文書のうち、一三七点を収録いたしました。これらは、千川上水の保守・管理・運用に関わるものを中心で、地域的にも千川上水の取水口のある上保谷村から巢鴨を経て、江戸市中の給水区域までの全流域にわたっており、千川上水研究には必要不可欠のものであります。

〔頒価六〇〇円〕

◎郷土資料館研究紀要

『生活と文化 第九号』

今回の紀要では、『特集』として「博物館の展示を考える」を掲げ、井上潤「特別展『テレビがなかったころ落語と映画は娯楽の王様だった』によせて」、北村敏「特別展『町工場の履歴書』を見て」、秋山伸一「地域博物館の特別展を考える」、伊藤暢直「『都市化』を展示するということ」の四編の論考を掲載しました。ほかに、渡辺智裕「江戸氏研究の成果と鎌倉期の江戸氏の婚姻関係について」、横山恵美「内国勸業博覧会出品状況にみる豊島区地域の産業動向」、一條三子「学童集団疎開、『地方』からの解題」の三編の研究論文を収録しました。いずれの論考も力作です。博物館の展示に興味をお持ちの方、豊島区および周辺地域の歴史についてもっと深く知りたい方は、是非ご一読ください。

〔頒価九〇〇円〕

ここでご紹介した刊行物は、いずれもまもなく発刊となります。入手を希望される方は、郷土資料館までお問い合わせ願います。

編集後記

「今年の冬は本当に暖冬だったの？確かに雪の降った日は少なかったけれど、あれだけ寒ければ充分じゃない？」と思っっているのは編集子だけでしょか。それでも、春の足音が確実に聞こえた今日このごろ、寒さですっかり丸くなっていた背筋も日に日に伸び、今ではそっくり返って歩いています（？）。暑さ寒さも彼岸までとは、まったくよく言ったものです。

* * *

お待たせしました。「かたりべ 37号」の発刊です。本号では、連載「一点の資料から」を二ページに増やし、内容もさらに充実、年度末スペシャルバージョン」としました。他の記事も、執筆陣一同年度末最後の力をふり絞っての力作ぞろい（のはず）です。

かたりべ
No.37

1995年3月25日
豊島区立郷土資料館
豊島区西池袋2-37-4
電話03-3980-2351

豊島区広報印刷物L3-06-091
本紙は再生紙を使用しています